

演劇ユニットハナウタ 旗揚げ公演

「FLASH BACK」 作 夏井ひらめ

山崎 … 大学生。アルバイトとある詩作家の家に住み込むことになる。(19)

藤乃 … 作家。大学には行っていない。足が不自由。(18)

遠藤 … 文芸部の先輩。よく缶コーヒーを飲んでいる。男っぽい口調が特徴。(21)

場面1

遠藤 今日から一カ月、よろしく

藤乃 ええ。

遠藤 ええ。って、感動の再会なのに

藤乃 ……。

遠藤 ……まずは何したらいい？掃除？洗濯？あ、それともお昼、食べる？

藤乃 黙って。

遠藤 ……締め切り間近？

藤乃 …………。

遠藤 ああ、ごめん。邪魔したな

藤乃 ……

遠藤 ……あのさあ

藤乃 何

遠藤 仕事、忙しい？

藤乃 今日は

遠藤 締め切りいつ？

藤乃 夕方

遠藤 作家、大変なんだな

藤乃 別に、そうでもない。

遠藤 いつもこんな感じなの？締め切り前は

藤乃 今回だけ

遠藤 そっか。良かった

藤乃 何が

遠藤 いつもこんなだったら大変だなあって

藤乃 そうね

遠藤 ……あのさ

藤乃 何

遠藤 ごめん

藤乃 謝らないで

遠藤 私さ、藤乃から連絡が来るまで、何か、逃げてて

藤乃 ……

遠藤 でもようやく、向き合えそうで

藤乃 良かったね

遠藤 だから藤乃も、そろそろ、向き合おうよ

藤乃 ……そんなこと、

遠藤 私、もう逃げないから。ちゃんと藤乃のこと見るからさ

藤乃 ……勝手にして

遠藤 ……仕事、邪魔したな。何かお茶でも入れようか

藤乃 私はただ、誰かに手助けしてもらわないと生活できないから、かなえに頼んだだけ

遠藤 ……そっか。

藤乃 そうだよ。

場面2

山崎 (読書をしていたが眠くなり、やがてソファに寝転ぶ)

遠藤 ……山崎。やーまーさーぎっ

山崎 ……あ、遠藤先輩。お久しぶりです

遠藤 おう。

山崎 えっ、っていうか先輩、どうしたんですか。急に部活に顔出さなくなつて。はーあ。一カ月も私放つたらかして、許されると思つてるんですかあ？

遠藤 別に。忙しいんだよ

山崎 ええー？先輩が忙しい？信じらんない

遠藤 私だって忙しい時くらいあるよ

山崎 そーですか。で、何ですか？

遠藤 ？

山崎 何で文芸部、来なかつたんですか？私これでも、寂しかったんですよ

遠藤 だから、忙しくて

山崎 忙しいだけじゃ理由になりません。何でなんですか？

遠藤 ……バイト。

山崎 せ、先輩が、バイトっすか

遠藤 ……おう。

山崎 親の金で悠々自適な生活を謳歌しているだけでは飽き足らず更にバイトですか！？ 一体何があつたんですか、はっ、もしや……貢いでるんですか？

遠藤 失礼な

山崎 ど、どんなバイトを…？

遠藤 ……住み込みバイト

山崎 住み込み！？

遠藤 ある作家……知り合いに頼まれて、バイト代出すからしばらく一緒に住んでくれ、って。

山崎 ……いくらです？

遠藤 このくらい。

山崎 ……先輩するい！ずるいです！

遠藤 いやいや、ずるくないよ。これは私が頼まれたんだし全然ずるくない

山崎 今募集してたりは!?

遠藤 ええ? 何山崎、バイトしようかと思って思ってる?

山崎 はい

遠藤 やめときなよ。おすすめしないから

山崎 え、何ですか?

遠藤 やばい奴だから。

山崎 私より?

遠藤 お前より。

山崎 ……いや、それでもこれは、行くしかありませんよ。

遠藤 待て待て山崎、落ち着け

山崎 いいえ先輩、私は落ち着ききってます。決して血迷ってなどっ

遠藤 完璧血迷ってんな

山崎 そんなことなくないですけどお!?

遠藤 隠すの下手くそだなあ。…はあ。お前、ちゃんと考えたか?

山崎 考えましたよ! よく相談しましたしね、お財布の身と

遠藤 ほんつとうに、お前、行くつもりか?

山崎 当つたり前じゃないですか。もう先輩、早く教えてくださいよその人の連絡先

遠藤 ……いやいやいや。どうせお前金目当てだろ

山崎 そりゃもちろん。お金に困ってるんで

遠藤 それなら他当たれ

山崎 あああ、えっと、そうじゃなくて単純に私、興味が湧いたんです。だから行かせてください!

遠藤 ……嘘だろ?

山崎 嘘じゃないですほんとです、だから教えてくださいこの通りですっ

遠藤 具体的には、どこに興味を湧いたんだよ

山崎 え、

遠藤 それ言わないと教えないからな

山崎 それはですね、作家だって、ところでしょうか

遠藤 それから?

山崎 私、文芸部じゃないですか、だから作家って、一回会ってみたいなって、ね?

遠藤 でも変なやつだけど?

山崎 作家はまず変なやつしかなれないですって、多分。

遠藤 ……お前、頑固だな

山崎 昔っから、頑固だけが取り柄なんで

遠藤 ……あっそう。(名刺を渡して)

山崎 うわああああありがとうございますっ

遠藤 来週の金曜日、ここな。

山崎 これでひいふうみい…:あつ、はい分かりました

遠藤 じゃ、帰るわ

山崎 あ、先輩、ありがとうございました!

場面3

SE インターホンの音

遠藤 ……藤乃？ 鍵…あった。勝手に入るぞー

藤乃 不審者。泥棒。何しに来たの

遠藤 何だよ、心配してきてやったのに

藤乃 心配してきてやったあ？ 偉そうに何

遠藤 藤乃、あのさ、アルバイト希望いるんだけどさ

藤乃 ちょっと無視？ 何様のつもり

遠藤 とりあえず名刺渡した、来週の金曜日、来てもらうから

藤乃 ……はあ！？ そんなの聞いてない

遠藤 そりゃ今日決めたから。まあうちの後輩だし、安心して

藤乃 安心してって……んな無茶な

遠藤 山崎はいいやつだし、こき使ってやってよ

藤乃 こんな荒れた部屋に、かなえ以外の人があるとかな信じられない

遠藤 それはこれから掃除したら問題ないだろ

藤乃 それはそうだけど。でも、かなえが来るだけで十分なのに

遠藤 私はしばらく顔出せなくなるから。その間の代わり

藤乃 ええ…何だよ

遠藤 何でも

藤乃 答えになってないですけど。

遠藤 山崎、報酬が聞いていたら息荒げて目の色変えたんだよ。これはいけるなって

藤乃 こんなうまい話、誰でもそうなるに決まってるけど、でもさあ

遠藤 いや？

藤乃 嫌、じゃないわけがない

遠藤 まあまあまあ。いいじゃん。気分転換にさ

藤乃 ……最低。

遠藤 何とも言うってくれ

藤乃 ……その、来週来るって人、どういう人なの。そもそも女なの男なの

遠藤 女。そうだな、素直で馬鹿で、うるさいやつかなあ

藤乃 うわ、苦手そういう子

遠藤 藤乃も似たようなタイプだろ

藤乃 一緒にしないでくれる？

遠藤 藤乃は気にし過ぎ。お金が絡んでるんだから普通に仕事の相手として接しなよ

藤乃 一緒に暮らすのって思いのほか勇氣いるんだよ

遠藤 それに、こんな引きこもってばっかじゃいい話も思い浮かばないだろ

藤乃 な、かなえに何が分かるの！

遠藤 実際問題そうだろ

藤乃 ……

遠藤 ま、悪い奴じゃないしむしろいい奴だよ。だからさ、ちょっとの間、頼むよ

藤乃 ……そんな人来るくらいなら、誰も来なくていい。

遠藤 じゃあどうやって生活するんだよ

藤乃 一人でだって生活できてた！

遠藤 強がるなって。藤乃は作品作りだけに専念すればいいんだから

藤乃 何それ。

遠藤 あー…ごめん、でもさ、ちょっと考えてよ。な？

藤乃 ……

遠藤 また来るよ

場面4

部室。だらだらしている二人。

山崎 ……暇ですね。

遠藤 そうだな。

山崎 山手線ゲーム、します？

遠藤 しない

山崎 あっ、私オセロ持ってるんですけど！

遠藤 しない

山崎 なーんだ分かりましたよ、先輩はあれですね？ モンハンがやりたかったんですね？

遠藤 ……あのさあ

山崎 おっやりましょうか早速

遠藤 やらない。

山崎 先輩機嫌もノリも悪くないですか？

遠藤 普通。

山崎 どの口が言ってますかこの口ですか？ 山崎には何でもお見通しなんですよ？

遠藤 あのさ、バイトのことなんだけど

山崎 あ、はい。

遠藤 何か、あっち機嫌悪くて。会ってくれるかなって感じでさ

山崎 そうなんですか…まあ、私は別に。暇なので、いつでも大丈夫ですけど

遠藤 おう。ごめんな、行くなって言ってはあるから、まあある程度の準備はしてるだろ

山崎 え、先輩も行くんですか？

遠藤 まあ一応最初だし。私は保護者みたいな感じだとも思ってる

山崎 保護者って。藤乃さんもいい年なんじゃないんですか？

遠藤 いい年つつたつたって、まだ十八だよ。成人もしてない。危なっかしい

山崎 過保護

遠藤 ……うるさい

山崎 先輩は、その藤乃ちゃんのところは何でアルバイトしに？

遠藤 ……助けてくれていきなり電話が来て。会いに行ったら空き巣でも入ったのかわつてくらい部屋荒れて。藤乃はぴりぴり

りしてるわで、聞いたら締め切り前って。だから家事してくれって、何かめちやくちや都合よくないか？

山崎 元カノに呼び出される元彼……

遠藤 ……そういう例えはリアルだからやめよう？

山崎 まあでも、作家って大変っすね

遠藤 自分の生活より仕事優先してるから

山崎 命燃やして書いてるんですね！

遠藤 ほどほどにしてほしい

山崎 そういえば藤乃さんとはどんな関係なんですか？

遠藤 昔っからの知り合い。

山崎 へえ？ いつくらいからの？

遠藤 小学校低学年くらいからかな

山崎 うわ、じゃあ藤乃ちゃんと遠藤先輩は幼馴染なんですね

遠藤 どっかかっていうと妹かな

山崎 先輩の妹枠狙ってる身からするとちよっと嫉妬しますねー

遠藤 適当なこと言うなよ

山崎 ばれました？

遠藤 ばれるも何も

山崎 思春期真っ只中なんですネ、藤乃さん

遠藤 不安定な時期なんだろうな

山崎 小説からは全然そんな感じしないのに

遠藤 え、何お前、藤乃の小説読んだのか

山崎 一応。部室にあったので

遠藤 珍しいの置いてんだな部室……どうだった？

山崎 どうって…何か、表紙通り。白かったです

遠藤 白かったって。どういう意味だよ

山崎 純粹っていうか、夏の白いワンピースみたいな、感じですよ

遠藤 変な感想

山崎 いや、私でもうまく言葉にできなくて。深いですよ、この本相当

遠藤 まあ、な。私の幼馴染だからな

山崎 先輩はそこ、威張る権利無いですから

遠藤 うるせえなあ。いいじゃんかよちよつと威張っても

山崎 はいはい

遠藤 はいはいってお前、私は先輩だぞ？！

山崎 こういう時だけ先輩面しないでくださいよー

場面 5

SE インターホンの音

遠藤 藤乃入るぞー

山崎 お邪魔します…

藤乃 あ、

山崎 こんばんは。えっと……藤乃さん

遠藤 こいつが言ってた、アルバイト希望の

山崎 山崎、千絵っていいいます

藤乃 山崎さん……あの、アルバイト希望なんですよ

山崎 そうです。遠藤先輩から教えてもらって

藤乃 何か聞いてますか？

山崎 いえ特に何も……お給料がいいってことくらいしか

藤乃 はあ？ 呼ぶならちゃんと説明しといてよかなえ

遠藤 ごめんって

藤乃 ……ごほん。アルバイトっていうのは、一カ月私と住むっていう……ただそれだけなんです

山崎 ……え、それだけ？

藤乃 はい。それだけ。

山崎 何か、家事やったりとかは…

藤乃 あ、それも。あと、私こう見えても足が不自由で。その生活の補助をお願いします

山崎 はい、それは、大丈夫です頑張ります……先輩全然それだけじゃないじゃないですか

遠藤 シー

藤乃 それと、山崎さんもご存じだと思っんですけど私、小説を書いていて

山崎 あ、読みました、この本、私とても好きだなあって

藤乃 ありがとうございます。……締め切り前とか、ギリギリするかも、知れないです

山崎 あるあるですね！ 手を取り合って乗り越えましょう！

藤乃 ……もう言うことないんだけど

遠藤 ええ？ あー。じゃあ、何か、そんな感じだから。うん。はい

山崎 何か分かりました、帰ったら早速準備です！

藤乃 あと分かんないことあったら、かなえに聞いてください

遠藤 私かよ

藤乃 とりあえず、また連絡します。かなえ送ってあげて

遠藤 はいはい

山崎 お邪魔しました！

遠藤 遠藤だけすぐ戻ってくる

遠藤 どうだった？うちの先輩は

藤乃 人見知り発動って感じ、怖かった

遠藤 はは、まあそんなびびんなんて

藤乃 ……何か、山崎さんの方が、しっかりしてたね

遠藤 こういう時はちゃんとする奴なんだよ

藤乃 かなえ本当に先輩なの？

遠藤 先輩面するのあんまり得意じゃないんだよ

藤乃 言い訳だ

藤乃 ……ねえ

遠藤 どうかした？

藤乃 かなえは、もう、小説家にならないの？

遠藤 ええ？ 急にどうしたんだよ

藤乃 別に。いいから答えてよ

遠藤 ……うーん。今のところ、ならないかなあ

藤乃 何で？

遠藤 藤乃がいるじゃんか

藤乃 私のことはいいから。ずっと考えてたの。かなえの方がいい話書くのに、何で書かないのかって

遠藤 いい話って、書いてたのはずっと前の話で

藤乃 かなえ、私の本読むときいつもいっぱい、メモして、感想書いてくれるよね

遠藤 まあ、一応

藤乃 それって自分が書きたいからじゃないの

遠藤 ……

藤乃 私のせいにして書けないって、もう、書きなよ。自分の話

遠藤 ……違うよ、純粋に、読者としてあややって

藤乃 うまく言えないけどさ、それは違うよ。かなえは書かないと

遠藤 ……もう書けないよ

藤乃 何でよ！

遠藤 ……

藤乃 黙らないでよ、向き合うんでしょ！

遠藤 ……ごめん。私はもう……

藤乃 ……何でよ……

遠藤 ……ごめん

SE インターホンの音

藤乃 あれ、

遠藤 帰ったんじゃないのか

山崎 あ、いえ。忘れ物しちゃって。

遠藤 入れよ

藤乃 あ、本ですよ。山崎さんのかなあって思ってたんです。はいどうぞ

山崎 あっ、ありがとうございます。……あのお、ここで何してるんですか、先輩

藤乃 密会……ふふふふ

遠藤 誤解招くから。普通に、お茶会だよ

山崎 お茶会！？ 遠藤先輩からよもお茶会なんて言葉を聞くことになるとは

遠藤 何してようが別にいいだろ

山崎 いや冗談でもお茶会はないです

遠藤 掘り返すな

藤乃 いいなあ、仲良くて

遠藤 誰がこんなやつと

山崎 ひどい。先輩それは流石の私でも傷つきますよ

遠藤 あーはいはい。お前めんどくさい

山崎 何でもっと傷つくようなこと言うかなあ

藤乃 ね。山崎さん、用が済んだなら、帰ってもらってもいいですか？

山崎 え、

遠藤 藤乃

山崎 あ、……はい。すみません、お騒がせして。お邪魔しました

遠藤 急にどうしたんだよ

藤乃 別に

遠藤 何、妬いてんの？

藤乃 気持ち悪いこと言わないでよ

遠藤 ……最近、どう？

藤乃 どうって、何が？

遠藤 夢。今も見るのが

藤乃 ……毎晩見るよ。忘れられないんだねああいうの。トラウマっていうの？怖いなー

遠藤 大丈夫か

藤乃 何今更。別に。大丈夫。

遠藤 無理してないか？ 本当に大丈夫か？

藤乃 だから大丈夫だって。もう何ともないし。

遠藤 ……なら、いいけど。

藤乃 うん

遠藤 藤乃、本当に大丈夫なのか

藤乃 大丈夫だってば！ しつこい、触るな

遠藤 ……ごめん

藤乃 嘘つき。本当は心配なんかしてないくせに

遠藤 そんなこと

藤乃 もう二度とこないで

遠藤 ……………

場面 6

SE インターホンの音

山崎 こんにちはー、今日からアルバイトに来ました、山崎です！

藤乃 はーい。鍵はポストに入ってるので

山崎 あ、はい。お邪魔します……えっと……ごめんなさい、うまく荷物まとまらなくて……

藤乃 いいんです。好きに使ってくれて構わないので。今日からよろしくお願いしますね
山崎 はい。こちらこそ、ふつつかものですけど

藤乃 気になさらないでください

山崎 ……藤乃さんは、いつもここで小説を？

藤乃 はい。窮屈な部屋だけど、言葉はよく降ってきます

山崎 降ってくる？

藤乃 降ってくる

山崎 へえ

藤乃 山崎さん、小説、書いたりします？

山崎 私はからきし。読む側の人間です

藤乃 そうなんですネ

山崎 恥ずかしいんですけど

藤乃 全然。そういう人達のおかげで、仕事は成り立ってるので

山崎 藤乃さんの書く小説、好きですよ

藤乃 はい。ありがとうございます。……でも私、自分の書く小説好きじゃなくて

山崎 そうなんですネ？

藤乃 時々、何で書いているんだろうって思うんです。もちろん最初は、読書感想文とか作文とか、とにかく書くことが好きだったから、いっぱい、書いてたんですけど。今は……

山崎 ……書くの、楽しくないんですネ？

藤乃 楽しいじゃなくて、仕事なので。でもかなえの方が、もっといい話書くんですよ

山崎 遠藤先輩小説書いてるんですネ？

藤乃 昔の話。小説家目指してたんです。でも途中で諦めちゃって。だから私が代わりに書いているなんて、まあ後付けにも程があるんですけど

山崎 いいんじゃないですか？

藤乃 え？

山崎 書く理由は人それぞれだし、藤乃さんは先輩のためにつけてだけ。それで十分ですよ

藤乃 ……そっかあ。それで、いいんですかネ

山崎 いいんです！ 先輩のためにも、自信もってください

藤乃 ……はい。何か、すみません急に、こんな話

山崎 私こそ、いきなり偉そうにごめんなさい

藤乃 さっきの話、内緒ですよ？

山崎 もちろん

藤乃 あ、そう。聞きたかったことがあって

山崎 なんですネ？

藤乃 かなえて、文芸部ですつね。そこではどんな感じなんですネ？

山崎 うーん……そうですね。よく缶コーヒー飲んでますね

藤乃 缶コーヒー……

山崎 頼れる先輩っていうよりも、いじりがいのある先輩ですネ

藤乃 ああ、想像できるかも

山崎 私がいつも文芸部のソファに座って、先輩は向かいの机で缶コーヒー飲みながら、適当に本読んでるんですよ。それが定位置で、それが文芸部の日常って感じで、

藤乃 へえ

山崎 遠藤先輩、ほんとにずっと缶コーヒー飲んでるんですよ。鞆の中から何本出てくるのってくらいですよ

藤乃 かなえはカフェイン中毒だから

山崎 やっぱり！ でも藤乃さんの方が、先輩のこと、よく知ってるんですよ？

藤乃 そうですね。昔っからずっと、一緒にいるので。

山崎 先輩の恥ずかしい昔話とかないんですか？

藤乃 え、そんなの聞いてもどうにもなんないですよ

山崎 そりゃあ…いじりのネタにするんですよ

藤乃 あははは、悪趣味ですね

山崎 こんな序の口ですよ

場面7

山崎 先輩？ どうしたんですか陰気な空気醸し出して

遠藤 別に

山崎 うっわ。どこの女優っすか

遠藤 山崎、お前何で文芸部に入ったの

山崎 どうしたんですか急に

遠藤 ……

山崎 ……そりゃあ、本が好きだから？

遠藤 こんなしょうもない部活、入ってたって貴重な人生の夏休み、無駄にするだけだぞ

山崎 全然しょうもないですよ！ 大学に入って私、今までの数倍本読んでますし、もっと本好きになったんですから

遠藤 ……そっか。

山崎 そういう遠藤先輩は、何で入ったんですか？

遠藤 私は、普通に、小説家になりたかったから

山崎 なりたかった？

遠藤 今もなりたいけど。でも才能がない

山崎 そんなの、分かんないじゃないですか

遠藤 何だかんだ言ってもう就職だしさ、小説書いてる暇なんかないし

山崎 そんなこと言う前に、行動したんですか

遠藤 ……したよ。そこそこ。

山崎 してないですね

遠藤 ……いいんだよ。別に。

山崎 はあ。誰がいつ夢を諦めようが私には関係ないですけど。諦めるなら、最低限行動してからにしてください。先輩、似合

わないですよ

遠藤 ……山崎は何か、夢とかは

山崎 私はないです。本とこれからも平和に、生きていけたらそれでいい

遠藤 はは。逆にはっきりしててかっこいいな

山崎 でしょ？ 公務員とかでいいんです。そんな感じで
遠藤 山崎に欲はないのか

山崎 強いて言うなら、編集とか。でもその時その時ちゃんと生きていけたらそれでいいです

遠藤 はー、すげえな山崎。ほんとに、すげえ

山崎 まあ、私はこんな感じなんです。先輩は私の代わりに夢、追っかけてください

遠藤 ……そう、だな。

場面 8

藤乃 ……ねえ。

遠藤 どうかした？

藤乃 かなえは、もう、小説家にならないの？

遠藤 ええ？ 急にどうしたんだよ

藤乃 別に。いいから答えてよ

遠藤 ……うーん。今のところ、ならないかなあ

藤乃 何で？

遠藤 藤乃がいるじゃんか

藤乃 私のことはいいからさあ。ずっと考えてたの。かなえの方がいい話書くのに、何で書かないのかって

遠藤 いい話って、書いてたのはずっと前の話で

藤乃 かなえ、私の本読むときいつもいっぱい、メモして、感想書いてくれるよね

遠藤 まあ、一応

藤乃 それって自分が書きたいからじゃないの

遠藤 ……

藤乃 私のせいにして書けないからって、もう、書きなよ。自分の話

遠藤 ……違うよ、純粋に、読者としてああやって

藤乃 うまく言えないけどさ、それは違うよ。かなえは書かないと

遠藤 ……もう書けないよ

藤乃 何でよ！

遠藤 ……

藤乃 黙らないでよ、向き合うんでしょ！

遠藤 ……ごめん。私はもう……

藤乃 ……何でよ……

遠藤 ……ごめん

藤乃 私といったら、書けないんでしょ

遠藤 え？

藤乃 悔しくて書けないんでしょ。自分の方が凄いのにな何でこんな奴がって思ってるんでしょ。……馬鹿じゃないの。私が書くようになったのはかなえがいたからなのに。勝手に劣等感感じて、……何でかなえは書いてくれないの

遠藤 ……違うよ。私は、…私が書けなくなったのは、あの日……

藤乃 あの日、私のお父さんを殺してから？

遠藤 ……

藤乃 かなえ、尊敬してたもんね。お父さんのこと。確かにお父さんは凄い作家だった。でも最低な親だった
遠藤 ……私はもうあの日、あの時から書くことはやめたんだよ。

藤乃 ……馬鹿じゃないの。

遠藤 ごめん

藤乃 書いてよ。

遠藤 ……

場面9

山崎 そういえば、藤乃さんのその足って…

藤乃 教えない

山崎 即答

藤乃 人の過去には滅多に触れるもんじゃありませんよー

山崎 あ、ごめんなさい

藤乃 それに。千絵に教えても良いことないもの

山崎 良いことは、確かにないかも

藤乃 メリットとデメリットが釣り合わない

山崎 うーんでも、気になるんですよねえ…

藤乃 ……知ったところで、どうにもならないよ

山崎 それはまだ分かんないですよ。実は画期的な治療法を知ってたりとか、するかも知れないじゃないですか。

藤乃 できる手は全部尽くしてる

山崎 ですよ

藤乃 ま、気にしたら負け

山崎 ……藤乃さん、冷たくないですか？

藤乃 千絵には最初からそこそこ冷たい

山崎 来たばかりのときはあんなに仲良く語り合っていたのに…

藤乃 下手な泣き真似しないの

山崎 もしかして、最初に会った時帰れって言っちゃったのまだ気にしてます…？

藤乃 何でまだそんな些細な事覚えてんのよ

山崎 凶星なんですネ

藤乃 うるさい

山崎 ……

藤乃 何

山崎 いや、この一カ月、一緒にいたので、あっさり話してくれるもんだと

藤乃 話したくなかったの

山崎 ……やっぱり教えてくださいよ。その足の理由

藤乃 ……

山崎 毎晩毎晩、藤乃さん、苦しそうなんですよ

藤乃 ……睡眠妨害？

山崎 そういうのじゃないですけど

藤乃 ならいいじゃん

山崎 でも、見過ごせないっていうか……

藤乃 夢はさ、もう癖みたいなものだから。どうしようもないの

山崎 いや、でも

藤乃 しつこい。もうすぐ終わりなんだから

山崎 もう終わりだから何も聞かないとか、そういうのじゃなくて

藤乃 ……そういうの、独りよがりって言うんだよ

山崎 教えてください。

藤乃 はあ……頑固

山崎 頑固だけが、取り柄なんです

藤乃 いい性格してると思うよ

山崎 かも知れません。

藤乃 ……私の足は、お父さんに潰された

山崎 ……どういう意味ですか？

藤乃 中学生の時、目が気に入らないとか、そんな感じのくだらない理由だった。お父さんはいつも私に暴力を振るってた。で、ある日酔っ払ったお父さんが金づちを持ってきて、お母さんの名前を呼びながら一生離れられないようにしてやるって。そう言うって、私の足を、ね。

山崎 ……それで

藤乃 ……無様。ほかの誰でもない親に、潰されるなんて

山崎 藤乃さん、

藤乃 変な同情、しないでね。お父さんはもう他界しているし。私は自由

山崎 自由

藤乃 自由

山崎 歩けないのには？

藤乃 うん

山崎 夢って、あれはその時の…

藤乃 そうだよ

山崎 ずっと見てるんですよね？ なのに、自由？

藤乃 何でもいいでしょ

山崎 遠藤先輩は、このこと

藤乃 もちろん知ってる。かなえがいなきや、今の私はいないから

山崎 辛く、ないですか

藤乃 全然平気

山崎 無理、してないですか

藤乃 うん、してないよ

山崎 ……歩けるようには、もうなれないんですか？

藤乃 さあね

山崎 やってみましょうよ、歩く練習、しましょう？

藤乃 ええ？ 何言ってるの

山崎 絶対歩けるようになれますから

藤乃 そんな、無理よ

山崎 無理じゃないです！ 藤乃さん、やってみましょ

藤乃 ……いい、いい

山崎 良くないですよ何も、良くないです

藤乃 ……放つといて

山崎 夢を見てる時の藤乃さん、凄く苦しそうなんです。もしかしたら、歩けたら、もう夢は見なくなるかもしれないじゃないですか。だから、ほら、

藤乃 やめて、触らないで！

山崎 藤乃さん、もういいんですよ。苦しまなくて

藤乃 うるさい、黙れ！！

山崎 ……藤乃さん。遠藤先輩だって、歩けるようになるの、きっと望んでますって

藤乃 かなえは、

山崎 藤乃さんが歩けるようになるだけで、幸せになる人はいますから

藤乃 ……あんたは何にも知らない

山崎 何もって、藤乃さん教えてくれないじゃないですか

藤乃 かなえは、私のお父さんを殺した

山崎 ……え？

藤乃 足が潰されたあの日、隣に住んでたかなえが異変に気付いて、お父さんを殺して

山崎 それ以上、言わないでください

藤乃 ……かなえのおかげで私は、今生きてるの

山崎 ……先輩が、そんなことする訳

藤乃 信じない？

山崎 ……

藤乃 ね。聞いてもどうにも、できないでしょ？

山崎 ……私、帰ります

藤乃 うん。一カ月間、ありがとう

場面10

遠藤 ……山崎

山崎 遠藤先輩。お久しぶりです

遠藤 おかえり

山崎 私のない一カ月、どうでした？ 寂しかったですか？

遠藤 全然。

山崎 ええ、即答なのが凄く傷つきます

遠藤 忙しくしてたから。寂しいとは思わなかった

山崎 そうですか、で、何してたんですか？

遠藤 ?

山崎 ほら。忙しくしてたって

遠藤 …小説、書いてた。

山崎 本当ですか

遠藤 おう

山崎 どうしたんですか。天変地異でもこれから起きるんですか？

遠藤 流石に失礼だろ……

山崎 何の話、書いてたんですか

遠藤 内緒

山崎 はは。今度、読ませてくださいね

遠藤 勝手にしろ

山崎 出版社とか、持っていましたか？

遠藤 ……これから

山崎 先輩なら持っていけばすぐ売れっ子小説家になれますよ

遠藤 どうだろうなあ。分かんないな

山崎 応援してますから。

遠藤 ありがとうございます

山崎 ……

場面11

山崎 藤乃さんの書く小説、好きですよ

藤乃 ……ありがとうございます。私、自分の書く小説好きじゃないんです

山崎 そうなんですか？

藤乃 時々、何で書いてるんだろうって思うんです。もちろん最初は読書感想文とか作文とか、とにかく書くことが好きだったから、とにかくいっぱい、書いてたんですけど。今は……

山崎 ……書くの、楽しくないんですか？

藤乃 楽しいじゃなくて、仕事なので。かなえの方が、もっといい話書くし

山崎 遠藤先輩小説書いてるんですか？

藤乃 昔の話ですけど。小説家目指してたんです。でも途中で諦めちゃって。だから代わりに私が書いてるなんて、まあ後付けにも程があるんですけど

山崎 いいんじゃないですか？

藤乃 え？

山崎 書く理由は人それぞれだし、藤乃さんは先輩のためにつけてだけ。それで十分ですよ

藤乃 ……誰かのために書く小説なんて空しいだけですよ

山崎 そんなことないですよ

藤乃 書かない人に何が分かるんですか

山崎 ……でも、藤乃さんの小説は面白いです

藤乃 書いている本人が空しいなら何の意味もないですよ

山崎 ……そんなこと……

藤乃 ……ごめんなさい。さっきの、内緒にしてください。

山崎 あ……はい。

場面12

藤乃 久しぶり

遠藤 急に呼び出すからどうしたのかと

藤乃 言いたいことがあって

遠藤 あつと、ごめんな

藤乃 ……何が？

遠藤 うちの山崎が、お世話になったなって

藤乃 ああ。全然、気にしてないよ。むしろいい刺激になりました。

遠藤 あの、足

藤乃 それ、今更過ぎない？ もういっぱい話したでしょ

遠藤 ……ごめん

藤乃 謝らないでいいよ

遠藤 何回謝っても足らないよ

藤乃 ねえ。謝ったら事実が変わると思う？ 過去がひっくり返ると思う？

遠藤 ……

藤乃 私、かなえがいたから、今まで生きてこれたんだよ？

遠藤 でも

藤乃 私さ、本当はもう、歩けるような気がするんだ。ずっと前に、傷は完治してて。後は気持ちの問題、的な。そんな感じがするの

遠藤 無理、してない？

藤乃 心配性だなあ。してないよ全然。っていうか、たまには無理してみたいなあ

遠藤 ……

藤乃 私ね。歩けるようになったら、千絵に会いに行きたい。歩けたよって言いたいのに

遠藤 ……うん

藤乃 かなえ。もう少しだけ、私と一緒にいてくれないかなあ

遠藤 ……え

藤乃 歩けるようになりたいの。お願い。私には、かなえが必要なの

遠藤 ……うん。分かった。一緒にいるよ。

藤乃 ……うん。

場面13

山崎 先輩。

遠藤 山崎、一カ月ぶりだな。おかえり

山崎 ……遠藤先輩は、藤乃さんの何なんですか？

遠藤 え？

山崎 藤乃さんのせいで、夢、諦めたんですよ

遠藤 ……それはいいんだよ。私は藤乃のために、生きてるから

山崎 ……うっわ。くっさい

遠藤 うるさいな

山崎 私には全然、分かんないです

遠藤 分かってもらいたいわげじゃないから

山崎 依存関係っていうんですか、こういうの。良くないですよ

遠藤 それは山崎に言われることじゃないよ

山崎 そうかも、知れないですけど

遠藤 なあ。私さ、大学辞めようと思うんだよ

山崎 ……え？

遠藤 大学辞めて、藤乃と暮らそうと思うんだ

山崎 いや、ちょっと待ってくださいよ。早まらないでください

遠藤 自分にはかなえが必要だって気付いたって、……そこまで必要とされてるのに断れる訳ないだろ。私は、藤乃のために生きていたいんだよ。

山崎 先輩、小説また書き出したんじゃないんですか

遠藤 ……勝手に見たんだな。……無理だよ。私には才能がない

山崎 そんな簡単に諦められる夢だったんですか？

遠藤 ……もういいだろ。放つといてくれよ

山崎 何ですか！何で二人とも放つといて、って、言うんですか

遠藤 ……

山崎 私は、二人がどうなればいいとか分かんないですよ。私にどうにかできるとも思っていないです、でも、行動しなきゃ

遠藤 そういうのはエゴっていうんだよ

山崎 ……

遠藤 山崎は自分の事しか考えてないよ

山崎 ……何ですか。何で、藤乃さんにそこまで

遠藤 私が藤乃にしたことは一生賭けても償いきれないんだよ

山崎 ……

遠藤 私は藤乃のお父さんを殺した。あの時は無我夢中だった。だからあれで正解だって、もちろん今でも思うんだよ。でもさ、

私を見るんだ。あの時の夢。

山崎 ……どんな？

遠藤 隣から藤乃の叫び声が聞こえて、咄嗟に床に落ちてた金づちを拾って、そのまま、藤乃のお父さんを思いつきり、殴る夢。

山崎 ……正当防衛、なんじゃなかったんですか？

遠藤 そうだよ。裁かれることもなければ、許されることもないけど。

山崎 ……でも

遠藤 あれから毎日、毎日同じ夢を見るんだ。私はどうすれば償いになるのか、必死に考えた。それで、藤乃から連絡が来るとき思いついたんだ。藤乃のために、生きようって。そうすることが償いになるって。

山崎 そんな……

遠藤 ごめん山崎。分かってくれよ

山崎 分かりたく、ないです

遠藤 頼むよ。もうこうするしか私は許されないんだよ

山崎 何から許されないって言うんですか

遠藤 神様、藤乃のお父さん、藤乃、……何より、自分から

山崎 ……先輩は、これからどうなるんですか？

遠藤 ……ずっと、藤乃のそばにいるよ

山崎 二度と会えないんですか？

遠藤 山崎が会いたいわって言うってくれるなら会うよ

山崎 ……行っちゃうんですか？

遠藤 ああ

山崎 先輩

遠藤 何だ

山崎 私も行きます

遠藤 ……え

山崎 私も、行きます

遠藤 どうして

山崎 ここまで聞いて、私、動かずにはいられないです

遠藤 ……だめだよ。

山崎 …………………ですよね。

場面15

藤乃 …………………ごめん

遠藤 どうして謝るの

藤乃 いつも、迷惑かけてるから

遠藤 別にいいよ

藤乃 ごめん

遠藤 謝るのは私の方だよ

藤乃 何で？

遠藤 元と言えば、私のせいでしょ

藤乃 ……そんなことないよ

遠藤 ううん。足は違うな。でも藤乃から家族を奪ったのは私だから、だから、ごめん

藤乃 …………………そうだね。私から家族を奪った

遠藤 うん

藤乃 あの時のこと、はっきり覚えてないんだ

遠藤 うん

藤乃 夢には見るんだよ。でもどれも臃げ、はっきり見えるのは私の、もう動かなくなった足と、目の前で倒れたお父さんだけ

遠藤 ……

藤乃 目が覚めたら、本当にもう歩けなくなって。それがいつも凄く、悲しい

遠藤 そっか

藤乃 夢だったらしいのって思うけど、夢にも逃げられないの、笑う

遠藤 ……ごめん

藤乃 かなえがもしあの時助けてくれなかったら、私多分生きてすらないね

遠藤 ……どうかなあ
藤乃 怒ってないから、私。むしろ感謝してる
遠藤 ……うん。

場面16

遠藤 (缶コーヒーを山崎の傍に置く)

山崎 ……あ、遠藤先輩。おはようございます

遠藤 おう

山崎 ……何か、悪夢、見ました

遠藤 どんな？

山崎 先輩が、藤乃さんとどっかいつちやう…的な

遠藤 どっかって。どこだよ

山崎 さあ。でも、いなくなっちゃうんです。とにかく

遠藤 私はまだここにいるけど？

山崎 ……そうですね。

遠藤 そういえば藤乃、足、歩けるようになったって。山崎にお礼言いたいって言ったた

山崎 何ですかこのいきなりいい話

遠藤 ありがとうございます、山崎のおかげだよ

山崎 私は……何にもしてないです。

遠藤 いいから。感謝は黙って受け取るべきだよ

山崎 ……先輩、これから、どうするんですか？

遠藤 藤乃と一緒に暮らしながら、ゆっくり小説、書いていくかなあ

山崎 本出るのが、楽しみにしてます

遠藤 いつになるか分かんないけどな

山崎 遠藤先輩、すっきりした顔してますね

遠藤 何だよ。すっきりしてちゃ悪いか

山崎 いいえ。今の遠藤先輩の方が、ずっといいです

遠藤 ……そっか。

M 相対性理論 FLASHBACK